

関本訓士：2003年度「藻類談話会」参加報告

2003年11月22日（土）、毎年恒例となりました「藻類談話会」が神戸大学瀧川記念学術交流会館にて開催されました。今年は例年に比べて参加者が少なく、約25名の方々が参加されました。

発表者（敬称略）と講演題目は以下の通りでした。

加藤重記（北海道大院・理）：日本産殻状紅藻イワノカワ科（スギノリ目）の系統分類学的研究について

二羽恭介（兵庫県立農林水産技術総合センター）：養殖ノリの由来と品種改良

関田諭子（高知大・理）：渦鞭毛藻の細胞外被の構造と形成過程

宮下英明（京大大院・地球環境学）：クロロフィルdをつかうシアノバクテリア”*Acaryochloris*”の謎

最初の講演者の加藤さんは、大学院生時代に博士論文のテーマとして研究されてきた日本産イワノカワ科の系統分類について、サンプリング、培養の方法といったことから属、種を分けるひとつひとつの詳細な分類学的形質、分子系統データとの比較に至るまで多くのスライドを使用して丁寧に説明されました。私はこのような大型海藻の分類についての詳細なお話をお聞きする機会は初めてでしたので、それぞれの分類学的形質の意味、多様性、分類のストラテジーのご説明は非常に参考になりました。また今回解析に用いられたイワノカワ科紅藻は日本産のみでしたが、より詳細な系統進化、種分化を調べるために外国産株も解析に加えたいとおっしゃっていました。これにより日本産種のルーツや海流との関わり合いなどが解明されれば非常におもしろいと思います。

二羽さんのご講演は兵庫県の主要水産物である養殖ノリの品種改良についてのお話でした。あまり知られていないことですが、兵庫県はノリの生産量が全国第一位だそうです。これには会場からも驚きの声が上がっていました。お話によると、現在養殖されているノリはどのような気象条件下でもある程度一定の収穫が得られるように種付けの際に複数の品種を混合して種付けされているそうです。しかし殻胞子放出の時間がうまく揃わないため、漁師の方々は非常に苦労されていることでした。また、現在使用されているこれらの品種のほとんどはその由来や遺伝的特性が分かっていないと



懇親会でのひとこま

のことでした。二羽さんはノリの純系株の作成と遺伝的特性を解析するためにかけ合わせや遺伝子解析が行われており、より多収量で高品質なノリを安定に生産するために現場の漁師の方々と協力しながら研究されているということでした。普段何気なく食べているノリですが、二羽さんのような現場の方々の日々のご研究に支えられていることに改めて感謝の気持ちを感じることとなりました。

関田さんのご講演は渦鞭毛藻類の細胞外被の形成過程に関するお話で、アンフィエズマ小胞や鎧板が形成されていく過程を透過型電子顕微鏡を用いて詳細に観察されておりました。ご説明の時に用いられていたスライドの電子顕微鏡写真は非常にきれいな写真ばかりで、また様々な染色方法を用いて観察されており、非常に勉強になりました。また講演中多くの方々からの質問があり、非常に活発な質疑応答が行われておりました。

最後の宮下先生のご講演はご自身が発見された新規光合成細菌、*Acaryochloris marina*が持つクロロフィルdについて、その発見に至る経緯や構造的特徴、特性についてのお話でした。ご講演のスライドの中には*Acaryochloris*を分離されたパラオ共和国の美しい珊瑚礁や湖の写真が多くあり、見ている参加者にもこの細菌がどのような場所でどのように生活していたかが手に取るよう分かりました。また、1970年代以降全世界で発見された新規光合成真正細菌6種のうち3種は日本人、しかも岩手県の方が発見されたというお話には驚きました。またそこで宮下先生がおっしゃった「ブラボー岩手！！」のフレーズは非常に印象深かったです。

藻類談話会は学会と異なり、各発表で時間を気にせず質問が出尽くすまで質疑応答を行うことができ、藻類を対象とした様々な分野の研究に触れることができる数少ない機会であることに加え、学生もそれほど緊張せずにちょっとした疑問なども気軽に質問できるとても良い会合だと思いました。このようなすばらしい会合であるにも関わらず今年度の参加者が例年に比べても少なかったということで本当に残念でした。来年度はもっと多くの方々に参加され、より活発な議論が展開されることを楽しみにしております。

（甲南大院・自然科学・生物）



発表会場の風景